

朝鮮に於ける本地垂迹説

伊 藤 祐 晃

古來、本地垂迹の説は、本邦に於て創設されたものであると誤解され、其起源は奈良朝の前期即ち天武持統あたりの朝より徐々に現れたもので、正しく大成されたのは行基、傳教、弘法等の諸大徳に據りて開拓されたものであると謂ふ獨斷である。行基は東大寺大佛の件に就き伊勢大廟に、傳教は比叡山を開くに當り、大國主命を祀りて之を山王權現と仰ぎたるが、一實神道の起源で、次に弘法が眞言秘密の教義を宣傳するや、金剛界、胎藏界の兩部曼荼羅を以て一切法即ち萬物を攝して、神道も此曼荼羅中に包容されたものなりと謂ふに始まりたるか即ち兩部神道の基源なりとするのが普通の議論で、羅山一流や宣長篤胤輩の常に咆哮惡罵する處で彼等が此謬論を眞向に振りかざして論難攻撃を加ふるにも係らず、吾人の多士濟々たる先輩諸賢は未だ一人の之に對する反擊論あるを聞かず、寧ろ此等の説を是認せられし感ありて、何等の回答だも之に與えざるは、吾等の頗る怪訝に堪えざる處なりとす、此謬論誤解は率ゐて明治維新に於ける廢佛毀釋の源因なることを忘るべからず。

最近に文學博士辻善之助氏は「日本佛教史之研究中に本地垂迹の起源について」と題して頗る深刻なる研究を發表せられ古説の杜撰極まりなきことを縷説せられたるは、吾人の最も多謝する處なるも其論旨の根柢に於て吾人と其見を異にするは甚だ遺憾とする處なり。

古來の説并に辻博士の議論とは其根柢に於て吾人の見が相違して居ると云ふのは此神佛習合本地垂迹説は決して日本に於ける創見でも新發明でもなく佛教自體其物が遠く印度に發生の當初よりして之の意味を包容して居るので支那朝鮮は勿論のこと恐く佛教の傳播されたる諸國には悉く此思想の宣布されたのは當然の道理であると云ふのである。

抑も釋尊出世以前に於て、印度は既に九十五種の外道ありて、各々夫々深遠を極むと雖も其最後の所期は必竟天に生ずるを以て目的となす是等の最も古きは釋尊出世より八百年も以前の衛世師を始めとして釋尊に最も近きものを阿羅々仙となす、是ら九十五種に各々生すへき所期の天ありて皆之に生せんことを祈念するのである。

釋尊は斯の如き思想を離れて生死の根本を解脱するの法を發見せられて、從來外

道の最終目的たる生天の説を以て頗る劣等の教義なりと道破せられしものにして而も其生天説を根本より顛覆せず世界創造の大梵天も、其儘佛教中に之を包容して存置し而も生死解脱の大道を説示給ひしもので、

大乘に至ては仁王經に十八梵天を説き、大論に魔王を以て欲界の主となし魔天王を以て三界の主とするが如き皆是れ外道包容の旨趣から説かれたのである。

本地垂迹の説は全く法華經の所説より生れたるものにして法華經二十八品中の前十四品は迹門の説法にして方便の權教を開會して眞實の教を示すにあり即ち三乗の淺教を修むるものに對して汝等の修行は便ち是れ菩薩乘の方なりといふ如し、後の十四品は本門の説法にして迹門を開會して本門を顯すと稱せらる、即ち今日の釋迦は今始めて佛陀の地位に到りたるものにあらずして過去久遠劫の昔より佛陀なりと示すが如し、即ち過去七佛は皆釋迦の顯現したるものにして現在の釋迦は迹門の釋迦にして又本門の過去七佛等の化現也と説くのが本地垂迹の根本にして源と法華經説にして智者大師の判釋最も巧妙を極めたものにして決して日本に於て行基傳教弘法等の諸大士が創説せしものにあらざるは最も明瞭なる事實なりとす。支那及朝鮮に於て此思想の日本の如く發達せざるは彼國々各々國體を異にする。

を以てなり、支那に於て、老子を以て迦葉菩薩とし、孔子を以て光淨菩薩又は儒童菩薩といひ、顔回を以て月光菩薩の化現なりと云ふが如き假令佛者の牽強附會説なりと非難するものあればとて又一種の本地垂迹説なるは亦争ふべからず。

次に朝鮮に於ても國體既に彼れが如き、支那と同様、本邦の如く發達すべき必要を認めざるものとする。

然れども高麗仁宗王の朝、僧妙清なるものありりて其六年（我が崇徳帝の大治三年に當る）仁宗王に説きて林原宮城を築き八聖堂を宮中に置けり、其八聖とは

一曰護國白頭嶽太白仙人 實徳文殊師利菩薩也

二曰龍園嶽六通 實徳釋迦牟尼佛也

三曰月城嶽天仙 實徳大辨財天也

四曰駒麗平壤仙人 實徳燃燈佛也

五曰駒麗木覓仙人 實徳毗婆尸佛也

六曰松嶽震主居士 實徳金剛索菩薩也

七曰甌城嶽神 實徳勒又天王也

八曰頭嶽天女 實徳不動優婆夷也

當時日者白壽翰なるもの檢校少監の官を以て西京(即平壤)に居り妙清を以て師と爲すとあり當時妙清壽翰知常の三人を三聖と稱せらるゝに至りしが此八聖に對する、知常の撰文云く

不疾而速、不行而至、是名得一之靈、即無而有、即實而虛、蓋謂本來之佛、惟天命可以制萬物、惟土德可以王四方、肆於平壤之中、卜此大華之勢、創開宮闕、祇若陰陽、爰八仙於其間、奉白頭而始想、耿光之如在、欲妙用之現前、恍矣至真、雖不可象、靜、惟實德、即是如來、命繪事以莊嚴、叩玄關而祈嚮。

此等妙清以下儒佛の争によりて遂に謀叛に問はれて其終をよくせざりし人なるが、其實徳とは即ち本地にして本邦の神佛習合本地垂迹と何の異なる處かある、唯此時代が本邦に當て、崇徳帝の朝にして稍時代の遅るゝを以て余の此説を聞きて或博士は本邦の逆輸入論にあらずやと疑ひたるは如何に此説の日本製たる事の先入主となれるを知るに足る。